

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「私は、春休みに子供たちを連れて、岩手県に帰省する準備に取りかかっている。家族と帰省することは楽しみにすることであるが、次女のひどい乗り物酔いが「私」の悩みの種である。

「私」は、その乗り物酔い克服のために、「これまで試してきたことを思い出している。」

昔からあるおまじないのたぐい——たとえば梅干しを臍に当てておく、などということも、暗示にかけるつもりで試みたが、これも無駄に終わってしまった。座席を二人分占領してぐったり横たわっている次女が、服の下から手を入れて腹のあたりをもぞもぞさせていたかと思うと、

「これ、返す。でも、気にしないで。」
と、まだ絆創膏が十文字についている梅干しを手のひらにのせて出したときは、私はすっかりしよげてしまった。

こんなことを何度も繰り返しているうちに、次女自身も我ながら情けなくて、ひそかに原因を探っていたのだろう、遂に自分で、乗り物に酔うのはその乗り物の窓が密閉されているからだということを見つけた。次女の乗り物酔いの妙薬は、次女の言葉によれば『風』であり、『酸素』なのである。次女の旅には、『風』と『酸素』が必要なのだ。

実際、次女はそのことを発見してから、電車やバスやタクシーには酔わなくなつた。どれも窓が開くからである。ところが、飛行機や特急列車は、そうはいかない。それで、次女はいまでも、帰郷の旅が近づくとたびに、

「特急はどうして窓があかないの？」
と恨めしそうに訴えたり、

「あああ、また盛岡まで六時間の辛抱か。」
などと、うんざりしたりすることになる。

盛岡まで、というのは私たちの町には特急は停車しないので、盛岡で普通列車に乗り換えなければならぬからである。盛岡で普通列車に乗り換えると、次女は早速窓際に陣取って窓をあけ、存分に『風』と『酸素』を補給する。次女は、みるみる蘇る。ほおには赤みが、目には輝きが戻ってくる。

「ああ、おなか空いちやった。」
そういつて話す声にも、張りが出てくる。

次女は、ときどき窓から吹き込んでくる風に向かって鼻を突き出し、目を細くして、じっとしている。

私は、そのときくらい次女が気持ちよさそうな顔をするのを見たことがない。まるで、好きな人の膝の上に背中を丸くして、ころころと喉を鳴らして仔猫のような顔をしている。

きのうの夕方、私は、無精^aしていた頭があまりにもひどくなったので、昔風に七三分けた頭が好きなおふくろをびっくりさせないように、次女を連れていつもの理髪店に出掛けたが、そのとき、家の近くの川べりの道で、チリ紙交換の車に出会った。【中略】

私と次女が会った車は、声といい節回しといい、岩手の町の駅のアナウンスそっくりであった。それで、私は、その車とすれ違ってから次女にそういつてみた。

「……そういえば、似てるね。」
と、次女はちよつと耳を澄ませてからいった。

それきり、次女は黙って歩いたが、やがて、ねえ、お父さん、といった。
「日本には、窓が開く汽車ってないの？」

「それはあるよ。」と私は答えた。「あるけど、そんな汽車は各駅停車ののろくさい汽車だよ。」

・ 解答は全て解答用紙に記入しなさい。
・ 字数制限のある問いは、句読点も一字に数えます。

「のろくさくても上野からその汽車に乗れば、お祖母ちゃんとこまでゆける？」
「ゆけないね、途中で何度か乗り継ぎしないと。お父さんが学生のころは青森行きの普通列車が何本もあったんだけど、いまは一本もなくなった。でもね、各駅停車を乗り継いでいくと、時間ばかりじゃなくお金もかかるよ。途中で一と晩か二晩、旅館に泊まらないといけないから。それに、食事だってそれだけ余計にしなくちゃならないし。」

次女はちよつと黙っていたが、
「私のお小遣い、来年までは貰わないことにしても、足りないかなあ。」
と、独り言のようにそういつた。

そのとき、私は正直いつて、ちよつと胸を突かれたような思いがした。次女の悩みがそれほど深刻なものになっているとは思ひもなかったからである。次女の小遣いは、月々わずか三百円だが、それをそっくり一年間諦めてしまうというのは、子供にとつては容易ならぬことではないだろうか。

ゆうべ、私は、仕事が手につかぬままに、次女が憧れている『窓の開く汽車の旅』の思い出に耽つた。私は、受験生時代から二度目の学生生活の前半ごろまで、窓の開く普通列車にしか乗ったことがなかった。妻を初めて郷里へ連れ帰ったときも、それから何年か後に都落ちをしたときも、夜行の普通列車であった。その翌年の春、再起を志して単身上京したときも、やはり夜行の普通列車であった。

真夜中に、どこかのちいさな駅で、ごとりと停まる。浅い眠りから醒めて窓を上げてみると、郷里ではまだ遠かった春が微風に乗って流れ込んでくることがあった。誰もいないホームの柵の外から枝をひろげている桜が満開で、夜明けにはまだ大分間があるというのに、勿体ないほど花を散らしているのを見たこともある。

また、いつかの春の夜、どこかの駅から乗り込んできて私の前の座席に着いた中年の女の人が、窓を開けると、外のホームには、下は五つぐらいの男の子から上は小学校六年生ぐらいの女の子まで、同じ兄弟姉妹らしい五、六人の子供らがいる。「父ちゃんに、軀に気をつけてってな。」母ちゃんも風邪ひかねよに。「などと口々にいい、母親も、「あいあい、盆には父ちゃんと帰ってくつから。みんな喧嘩しねよに留守をしてれや。」と答え、発車のベルが鳴ると、突然、茶目な男の子が指揮棒を振る真似をして、子供らは低い声で「螢の光」を合唱しはじめた。

母親はびっくりして笑い出し、つきにはあわて気味に「やめれ、やめれつたら。」と子供らを軽くぶつ真似をしているうちに汽車が走り出し、ホームの灯が流れ去って外が暗闇になると、母親は小さく舌打ちして窓を閉めたが、不意に、その窓ガラスに額を強く押し当てて、すすり泣きをはじめた。

その夜の子供らの「螢の光」と、母親の額が窓ガラスに立てたごつごつという鈍い音は、まだ私の耳のなかにある。

4 今年の春は、窓の開く夜行列車を乗り継いで帰ろうか？ 次女と一緒に、仔猫のような顔をして窓から春の匂いを嗅ぎながら……。

(三浦哲郎『春は夜汽車の窓から』より)

問一 線部 a・b の語句の本文中での意味として最も適当なものを、次の

ア～エから選び、記号で答えなさい。

a 無精していた

ア めんどくさがって放置していた

イ 不潔なまま手入れをしていなかった

ウ 意地をはってこだわりつづけてきた

エ 元気がなくなってきたが、元気がなくなってきたが、元気がなくなってきた

- ア よく気が利いて心やさしい
- イ いたずら好きで無邪気な
- ウ 涙をこらえて悲しそう
- エ 子供らしくてかわいらしい

問二 — 線部1「次女自身も我ながら情けなくて」とありますが、次女がそう思うのはなぜですか。その理由として最も適当なものを、次のア〜エから選び、記号で答えなさい。

- ア 乗り物酔いのつらさを言い訳にし、座席にねころがっていた自分の姿がみつともなかつたから。
- イ ひどい乗り物酔いのためにいらいらし、知らず知らずのうちに家族に気をつかせていたから。
- ウ 絆創膏をつけたまま梅干しを返すという無神経な態度で、父親をひどく傷つけてしまったから。
- エ いろいろ試してきておまじないにまですがったのに、乗り物酔いが少しもよくならなかつたから。

問三 — 線部2「私は正直いって、ちよつと胸を突かれたような思いがした」のはなぜですか。それを説明した次の文の [] に入る適当な言葉を三十文字以内で答えなさい。

次女が、 [] と思っくらい深刻に悩んでいたとは、私は考えてもみなかつたから。

問四 — 線部3で、子供たちの合唱に対して、『やめれ、やめれつたら。』と子供らを軽くぶつ真似をしている「母親の気持ちを三十文字以内で答えなさい。

問五 — 線部4「今年の春は、窓の開く夜行列車を乗り継いで帰ろうか」と「私」が考えるようになったのはなぜですか。その理由を二つ、それぞれ四十文字程度で答えなさい。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ある大学では毎年、「あなたは末期ガンであと半年の命と宣告されました」の前提のもと、「残された時間をどう使うか」「最期の時間を誰とすごしたいか」「どんな言葉をかけてもらいたいか」といった問題を考えてもらうことになっている。その中でここ何年か、堂々とこう答える学生が目につくようになったのだ。

「私はそんな病気になることがないからわかりません」
 どうやらその学生は私の授業の方針に異をトナえよう、といった意図もなく、本当に素朴に「わからない」と言っているようなのである。

たしかにそれは間違いいではないし、哲学者であればそこが真実と言うかもしれない。しかし、本当の意味でその立場にはなれなくても、ちよつと想像力を使えば、「もし自分ならどうだろう」と考えるくらいはできるはずだ。というより、もし体験しないことはすべてわからないのだとしたら、その人はいま生きている自分以外の人の人生も気持ちも何もかも考えることができない、ということになってしまう。だいたい、「私じゃない人の気持ちはまったくわからない」という人ばかりになれば、社会そのものが成り立たなくなるのではない

か。
 生命倫理の講義は一般的に、「高齢者の立場に自分を置いて考えてみて」「もし自分の子供が脳死を宣告されたら」など、生死に関する極限状況に身を置きながら進めることが多い。そこで、「そうだったことがないからわからない」と言われれば、授業そのものができなくなる。

おそらくそう感じているのは私だけではないようで、いろいろ調べてみると、どの高校や大学でもこの手の講義をする時は、生徒や学生がよりその立場を想像しやすくするようにさまざまな工夫をこらしているようだ。

一番インパクト（衝撃）が強いのは、末期ガンなどに冒されている当事者自身が、体験談や現在の心境などを語ってもらう、というスタイルの講義だ。そういった講義の記録は『輝け！いのちの授業——末期ガンの校長が実践した感動の記録（大瀬敏昭著・小学館）』など、書籍化もされている。

また、アメリカでも最近、末期のすい臓ガンに冒され、余命数ヶ月と宣告されたカーネギー・メロン大学のランディー・パウシュ教授の最後の講義の様子がネットで広く流され、世界の感動を呼んだ。

とはいえ、そこで「余命わずか」という人物を間近に見て感動すること、その立場に自分を置いて想像してみることは、また違うようだ。私も自分の講義でパウシュ教授のビデオなども用いてみたのだが、「この人はエリート教授で自分とはぜんぜん違う」など、むしろギャップを感じた学生も多かつたよう²で、想像力の喚起にはつながらなかつた。【中略】

ここで、なぜここまで「他人の立場や気持ち」を想像できない若者が増えているのか、という疑問がわく。【中略】

ただ、「想像力が欠如している」という仮説を否定するような現象も見られる。それは、若者どうしでは「KY（空気が読めないこと）」¹はとにかく最悪だと考えられ、相手の表情やメールの行間から必死に相手の気持ちや場の雰囲気³を察知しようとしていることだ。

インターネットの人気占い師のサイトにも、「空気を読むことは大切」と題したコラムがあつた。一部を引用させてもらおう。

『空気を読む』とは、言葉で現れていない状況を理解し、察知することです。たとえば相手が『怒ってないよ』と言っても、その言葉通り受け取らず、相手の表情や態度を見て相手の本当の気持ちを察知すること。それが空気を読むことです。空気を読めるということは、相手を思いやれること。空気を読めることで、マワリからあなたの評価が高くなりますよ³

対人関係におけるごく基本的なことが書かれているだけだが、逆に考えれば、占い師からこう解説してもらわなければ、このレベルのことにも気づかない人が増えているということか。いずれにしても若者は、「空気を読む」と称して、身近な人の心の中や言葉のウラを読み解くことにはかなりのエネルギーをツイヤしているようなのだ。

このことは、NHK放送文化研究所の調査で、「身近な人たちとナゴやかに毎日を送りたい」とネガう人があらゆる世代で増加しているという結果とも一致している。自分とは違う状況にいる人の気持ちはわからない、と言い切る一方で、他者の言葉や態度に傷ついた、という若者は増えている。【中略】ある女子学生がこう言った。

「私のまわりは、みんな親や友だち、彼氏の言葉に傷ついている子ばかりなんですよ」
 彼女たちは常にまわりの人たちの気持ちを读もうと気を配り、自分自身は心ない周囲の言葉や態度に深く傷ついている、と言うのだ。

人間の心的エネルギーには総量があり、無尽蔵ではない。そう考えると、ごく身近な人たちの気持ちを深読みし、相手が言った何気ない言葉に深く傷ついている若者たちは、それだけですべての心のエネルギーを使い切り、とても見たことも会ったこともないような人の状況や気持ちまでを想像する余力は残っていない、ということなのかもしれない。

他者に対する想像力は欠如しているのではなくて、その配分が、直接関係ない人よりも身近な人の方に著しく傾斜している、と考えたほうがよいのではないか。

(香山リカ『私は若者が嫌いだ!』より)

※ 喚起——注意や自覚、ある行動などを呼び起こすこと。

サイト——インターネット上で、情報が保有されている場所。

無尽蔵——いくら使ってもなくならないこと。

問一——線部 a e のカタカナを漢字で書きなさい。

問二——線部 1 で、筆者は最近の学生についてどのようなことを感じているのですか。三十字程度で答えなさい。

問三——線部 2 の具体的内容として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 末期ガンに冒された大学教授が行う授業のビデオから、生前の元気であった教授の様子を学生に想像させること。

イ 末期ガンに冒された大学教授が行う授業のビデオから、エリートと自分との違いについて学生に想像させること。

ウ 末期ガンに冒され、死を目前にしながら授業を行う大学教授の心情がどのようなものを学生に想像させること。

エ 末期ガンに冒され、死を目前にしながら授業を行う大学教授の肉体的苦痛に耐える辛さを学生に想像させること。

問四——線部 3 「対人関係におけるごく基本的なこと」とはどのようなことですか。六十字以内で答えなさい。

問五——線部のような一般的なならえ方に対して、筆者はどのように考えていますか。百字以内で答えなさい。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

筆者は内科医で、本文中の「ミチさん」は筆者が主治医として治療に当たった患者である。

同居のお嫁さんや娘さんによると、ミチさんは九十二歳で大腸がんの手術をした後、四年間、軽い野良仕事をしていたとのこと。パセリの出荷時期になると箱詰めを全部してくれて、みんな助かったと、笑いながら話してくれた。このミチさんの大腸がんを発見したときは、判断に困ったことを覚えている。進行した大腸がんであることと、九十二歳という高齢であることとで、家族とともに迷いながら、「ぼくがミチさんと同じ立場に立たされたなら、手術はしてほしくないな」とぼくの人生観を話した。暗に無理して手術をしなくてもよいのですよと伝えたかった。

しかし、心やさしい家族は困った。がんがあるのに、「何もしなくてよい」と決断できなかった。本人の意向をぼくが上手に確かめることにした。

しかし、驚いたことに九十二歳のミチさんはやる気満々だった。「病気があるのに手術しないほうがいい」と元氣いっぱい。同室の手術前の患者さんから借りた、呼吸訓練の風船をふくらませてみる。外科のドクターや家族の迷いはなくなった。九十二歳のおばあちゃんが自分の生き方をしっかりと決めた。がんが見つかったと聞いて、高齢者に一方的に手術を強要することも許されないうが、同時に高齢者や重度障害者には手術しないと、病院が勝手に決めることも許されない。何歳であろうと自己決定のできる方には、本当に病気の話をし

てあげ、患者さん自身に選択してもらうことが重要なのだ。

ミチさんの大腸がんの手術は成功し、回復も順調だった。術後の四年間、野良仕事ができたと聞いてとてもうれしかった。その後、ミチさんは脳出血を起こして寝たきりになってしまったが、「百歳のお祝いの日には、村で花火をあげて祝ってくれた。

寝床から見えるように、花火は近所の空き地から打ち上げられた。ところが笑い話のようだが、あまりに近すぎてミチさんにはシュツと上がる瞬間しか見えなかった。

この日、隣家のおばあさんが「百歳を祝う花火や菊明かり」と俳句を詠んでくれた。多くの人がミチさんの長生きを本当に喜んでくれた。

「パセリの出荷の時期には [] ほど忙しい、寝る時間もないほど忙しくなる。そんな時期に病人を看るのはホントつらいよ」

と涙ぐんでいた看病役の娘さんも、ミチさんが徐々に食事をとれなくなると、「ここまでよく生きた。よくがんばってくれた」と覚悟がしだいにできてきた。

一九九五年二月二日、ミチさんは水を二口しか飲めなくなった。

「あと何回、みなさんに来てもらえるか。次までがんばれるか。本当に貴い一日一日になつてきた」と家族がしみじみと語る。ミチさんのまわりのすべての人々が、最終コーナーをまわったことに気づいている。そして翌日、彼女は家族と親戚と近所の人々に看取られて、とても穏やかな表情で永眠された。

今日は死ぬのに

とてもよい日だ。

あらゆる生あるものが

私と共に仲よくしている。

あらゆる声が私の内で

声をそろえて歌っている。

すべての美しいものが

やってくる私の目のなかで

憩っている。

すべての悪い考えは

私から出ていってしまった。

今日は死ぬのに

とてもよい日だ。

私の土地は平穏で

私をとり巻いている。

私の畑にはもう最後の

鋤を入れ終えた。

わが家は笑い声で満ちている。

子供たちが帰ってきた。

うん、今日は死ぬのに

とてもよい日だ。

(丸元淑生訳)

3 ミチさんの看取りを終えたとき、タオスのプエブロ・インディアン、ひとりの老人の詩がぼくの頭のなかをかすめた。自分がいよいよ死ぬ。けれど、自分の子供が帰ってきて、孫がいて、自分の土地には鋤や鋤が入り、もう春の準備ができています。人間が死ぬという現実と、命のあり方を子供たちに伝え、自分の耕してきた大地を、移り変わる季節のなかでバトンタッチをしていく。ミチさんも同じだ。子供や孫に引き継がれたことを実感しながら、あの世へ帰っていった。永遠に別れる死は悲しい。死はいつやってくるかはわからないが、悲しいことに、死だけはすべての人間に平等にやってくる。

【中略】

このタオスの老人の詩はたくさんの人に訳されている。最後のフレーズ「うん、今日は死ぬのにとてもよい日だ。」は、肩の方が抜け、生きることも死ぬこ

とも自然に受け入れていく姿が、「うん」という言葉に隠されているように思う。自然なのか宇宙なのか神なのかはわからないが、大いなるものの呼びかけにこたえて「うん、今日は死ぬのにとってもよい日だ。」としめくくっているように思える。見事な命のバトンタッチが幻の光景としてぼくには見えたような気がした。

ミチさんも夫を看取り、九十二歳で大腸がんの手術を受け、二回の脳出血を起しながらも家族の素晴らしい看病を受け、百歳の祝いに村人に花火を上げてもらった。思い残すことなく、自分の家の畳の上で、たくさんのお孫さんたちの声を遠くに聞きながら、腰の曲がり始めた娘さんたちに手を握ってもらい、あの世に旅立たれた。

(鎌田實『がんばらない』より)

※ 野良仕事——田畑などでの作業。

憩う——ゆったりとくつろぐこと。休息すること。

鋤——田畑の土をほりおこす農具。

タオスのプエブロ・インディアン——

タオスはアメリカ・ニューメキシコ州にある都市の名。

プエブロ・インディアンはアメリカの先住民族「プエブロ部族」

のこと。

鍬——田畑を耕したり、ならしたりなどの作業に用いる農具。

問一——線部1「判断に困った」とありますが、筆者は、どうすることについて、判断に困ったのですか。二十五字以内で答えなさい。

問二——線部2について、「ミチさん」のどのような様子を見て、ドクターや家族の「迷い」はなくなったのですか。二十五字以内で答えなさい。

問三

I 本文中の [] に入る「猫」を使った慣用句を答えなさい。

II 次の①～⑤の [] に入る適当な動物の名前を、それぞれひらがなで答えなさい。

①「生き [] の目を抜く」

(すばやく、油断もすきもならないこと。)

②「 [] につままれる」

(予期しないことが起こり、何だかわからずぼかんとすること。)

③「 [] の一声」

(その場にいる人を従わせるような、有力者の一言のこと。)

④「袋の []」

(追いつめられ逃げることができないこと。)

⑤「数をつついて [] を出す」

(余計なことをして、かえってめんどうなことを引き出すこと。)

問四 寝たきりになり、死が近づいてきた「ミチさん」に対する家族の気持ちについての説明として最も適当なものを、次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア ミチさんの死が近づいたことを実感し、がんばっていつまでも長生きをしてほしいとミチさんに強く願っている。

イ ミチさんの死が近づいたことを実感し、たとえつらくても、ミチさんの看病をしながら農作業をしたいと強く願っている。

ウ ミチさんの死が近づいたことを実感し、残り少なくなったミチさんとの日々を大切に過ごしたいと強く願っている。

エ ミチさんの死が近づいたことを実感し、多くの人に、ミチさんとの最後のお別れをしに来てもらいたいと強く願っている。

問五 ——線部3で、ミチさんの死と、タオスの老人の詩とに、共通している点と筆者が感じているのはどのようなことですか。八十字程度で答えなさい。

四 次の——線部のカタカナを漢字で書きなさい。

① 今日は家庭ホウモンの日だ。

② 社員にチンギンをはらう。

③ 大シキユウかけつける。

④ 球場が大カンシユウで埋まる。

⑤ 親コウコウをする。

⑥ 実力をハツキする。

⑦ 飛行機をソウジユウする。

⑧ シンシヨウボウダイに話す。

⑨ 休日はモツパら寝て過ごす。

⑩ 不安の原因を取りノゾク。

